

サイド・オマール忌

学生部
留學生主幹
◆ 長岡 篤

オマール君の墓を守る会（世話人 園部宏子さんと息子さんの園部達夫氏）の主催による故サイド・オマール君の第三十二回法要が、さる九月五日（日）、京都の洛北「圓光寺」においてしめやかに営まれた。

法要には、京都大学病院でオマール君の治療にあたられた濱島義博氏（京都大学名誉教授、京都女子大学前学長、昭和十六年当時マレーシアでオマール君と親交のあった福田吉穂氏、修学院小学校の児童など七十人余りが参加し、本学からは小職が出席した。

今回の法要では、オマール君を知らない世代である地元の修学院小学校の児童約三十人並びに濱島義博氏の呼びかけによる京都女子大学の学生二十名が参加しており、オマール君を通じて、人類愛の深さ、平和の尊さ等が受け継がれていることに大きな感銘を受けた。

サイド・オマール君の墓碑の由来等について（墓碑の説明「等より」）
★マレーシアのジョホール州出身で、



京都洛北「圓光寺」にて

昭和十八年六月南方特別留學生の第一期生（五日市町光禪寺にお墓がある故ニック・ユソフ氏と同期生）として来日。
★昭和二十年広島文理科大学在学中に被爆。彼は被爆したにも関わらず、傷病人の看護に全力を尽くした。

★同年八月末、帰国のため東京に向かう途中、京都に立ち寄ったが、容態が急変し、京都大学病院に入院。既に末期症状のため、同年九月三日亡くなった。遺体は、当時の市営墓地である南禅寺、大日山に埋葬された。

★昭和三十五年にこのことが週刊誌に取り上げられ、この事情を知った京都の山端平八茶屋の主人が、弟の故園部健吉（世話人である宏子さんの夫）に墓の建立を依頼し、遺族の許可を得て、

昭和三十六年九月三日に現在のイスラム教式の墓碑が建立された。
その後、毎年法要が行われ、今年で三十二回目となっている。
（ながおか・あつし）

故ニック・ユソフ氏の墓は 広島大学原爆死没者慰霊行事委員会 が建立したのではない

歯 学 部
口腔生理学講座
◆ 菅野義信

広大フォーラム二十五期二号三十四頁のユソフ氏墓前法要の記事の最後の三行は、事実と異なり、誤解をまねく虞れが大で、また光禪寺に対し、大変礼を失しているの一言付記する。

引き取り人のない三個の骨壺の保管を依頼された光禪寺住職の星月農人氏は、南方特別留學生の不幸な原爆死に心を痛めた。当初、遺骨を遺族に返還することを考えたが、回教徒は死んだ土地で葬られ、墓は回教様式でなければいけないことが判つたのである。石屋と共に東京へ行き、青山外人墓地の回教徒の墓より大きく立派で、方角も正しい墓を、昭和三十九年（一九六四）五月に完成した。光禪寺墓地に占める大き

さは、日本風墓よりはるかに大きい。毎年八月六日の法要は、生前の故人を知る市井の方々に守られてきた。元本学国際主幹の江上芳郎氏が一時法要の世話をされ、あと筆者が引き継いだ。筆者も停年が近づき、慰霊行事委員会の横山英教授と前学長田中隆莊氏その他の方々の御厚意で、大学よりの石碑文が加えられ、大学行事の一端に加えられたのである。墓を建立したのは星月氏であり、守ってきたのは光禪寺である。
法要は市民が続け、行事委員会は、後から協力賛同したのである。ここ十年程の学内通信、広大フォーラムの記事からも明らかである。

（かんの・よしのぶ）